

中学卒業式四一回

皆さん、こんにちは。

今日は、皆さん、久留米大学附設中学校第四一回生、の中学卒業式です。今日の、この儀式は、附設における長い歴史的な重みがあり、また、小学校中学校併せて九年間の義務教育課程を終えた節目を示すものです。しかし、皆さんは、この後、附設高校に進学することになる、つまり、学校としては、中学と高校とを併せて一つなのに、なぜ中学卒業式をわざわざやるのだろうかという疑問もあります。儀式というのは、とても大事なことがあるのですが、それぞれにふさわしい重さというものがあります。中学卒業式はどうあるべきか、ということ、附設の校長になってからずっと考え続けているのですが、まだ、答えは出ていません。ただ、高校の卒業式とは違い、附設からの旅立ちの儀式ではなく、どちらかといえば、決意を新たにして附設での生活に取り組もうと確認する儀式であるべきだと、わたくしには思えます。皆さんは、いかがですか。

そんな想いもあり、中学卒業式の形を昨年から少しずつ簡単にして来ています。今年は、昨年よりも一層簡略化を進めました。それを寂しいと思うかどうかですが、簡略になった分のエネルギーを、これからの高校生活の充実に注いでください。

さて、先日、久留米大学の医学図書館の新着図書コーナーで、森浩美さんの

「父親が息子に伝える17の大切なこと」

という本を見つけました。双葉社という出版社から一昨年刊行されています。森浩美さんて何者だ、と言っても、皆さんの方が詳しいと思います。この本の、著者紹介に、作詞家とありましたが、わたくしには正直言ってみると来ませんでした。SMAPを始めとする多数のシンガーたちの歌詞を作っておられます。この本も、一章一章は、歌詞のように、それも息子との対話のように、書かれています。

森さんは、昭和三五年生まれ、何と、わたくしが高校三年生のときでもあり、これまでの経験も違いますから、森さんが伝えたいと言っていることの内容について、わたくしが百パーセント同意できるというわけではありません。しかし、少年が陥りがちな自己中心的な思い込みや思い違いを穏やかに諭しながら、社会に出て、立派に生きていくためには、また、しっかりと自分の人生を生きるためには、どう振る舞うべきか、どう考えなければいけないのか、ということ、歌詞のような文章で述べています。

この本に、書かれていることは、日頃から皆さんのことを気に掛けてくださる人たち、ご両親や先生、あるいは、大人の知り合いの人たちから、いつも聞かされていると皆さんが思っていることと違います。でも、語り口は違います。

森浩美さんの本は一冊附設の図書館にありますが、「父親が息子に伝える17の大切なこと」はありません。手配しておきましょう。

なお、医学図書館に、なぜ、このような少年向きの本があるのでしょうか。実は、もう一冊、

ダニエル・ゴットリーブ、「人生という名の手紙」（講談社、二〇〇八）

という書物も新着図書コーナーにありました。これは著者が孫に向けて書いたものらしいのですが、時間がなくて、中身の検討はできませんでした。医学図書館に、こういう本が収められているのは、

「生きるということはどういうことか」

という基本的な問いが、医者にとって欠かせないという判断があるからだと思います。

この問いは、しかし、医者だけに限らず、実は、誰にとっても大事なもののなのです。ところが、誰にも、答えはわかりません。それぞれの立場や視点から、問い続けるということに意味があるのだと思います。

皆さんにも、皆さんなりにこの問いに向かい始める時期が来た、まさに、今日の皆さんの卒業式の意義は、このことを感じることにあるのではないのでしょうか。

平成二四年三月一六日

久留米大学附設中学校 校長

吉川 敦